

高度成長期を駆け抜け、常に時代の先頭集団として活躍してきた団塊の世代。多くの人が今、思い思いの暮らしを始めている。県内でも、豊かな自然をフィールドに、こだわりを持って生活し、古里の情報を発信し続ける人たちがいる。4人の笑顔、汗、そして澄んだまなざしを追い、夢中となっている思いを聞いた。

いきいきいき

山形観光の応援団長に

戸沢村出身の造園家、矢口正武さん(60)は、東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」の代表。「まちネット」は去年、本県を「アジアのアルカディア(桃源郷)と称賛したイギリスの女性旅行家、イザベラ・バードの県内ルートを踏査した。ことしは山形市でシンポジウムを開く一方、芭蕉の「おくのほそ道」をたどる計画だ。

「まちネット」は、矢口さんを中心に造園・建築関係の知人やスポーツ仲間などで結成。学者、技術者、デザイナー、アスリートなど多彩なメンバーが各自の知識や経験を生かし、地方と連携して活性化を図る活動などに取り組んでいる。

イザベラ・バードの道の踏査は、去年六月に新潟県境から大里峠、萱野峠、朴木峠、黒沢峠、宇津峠などを越えて南陽市赤湯までを自転車で徒歩で、同十月には赤湯から上山、山形、新庄、金山などを経て真室川町及位までを自転車などでたどった。明治時代にバードが旅した街道の今を検証するとともに、各地で地域づくりの担い手や郷土史家らと交流した。

「まちネット」はおとし、源義経が平泉岩手県に逃れる際に通ったとされる県内ルートを踏査した。義経、芭蕉、バードを「三賢者」と位置付け、ことし

三賢者の旅を踏査する
戸沢村出身の「まちネット」代表
矢口正武さん(東京)

三月には山形市で「最上川・街道・三賢者」を通して観光山形の活性化を考えるシンポジウムを開く。また、義経、バードに続く第三弾として「おくのほそ道」を踏査する。

矢口さんは旧新庄工業高(現新庄神室産業高)を卒

「住んでいた時よりも山形の魅力を感じるようになった」



イザベラ・バードが歩いた黒沢峠を踏査した矢口正武さん(中央) = 去年6月

業し、東京の建設コンサルタンツ会社に就職。二十歳ごろからスキーに熱中し、三十代後半からはシーズンオフのトレッキングとして、トライアスロンも始めた。現在はスキー、トリアスロンのチーム「ペアーズ」の監督で、雄大な自然を舞台にマウンテンバイクやカヌー、オリエンテーリングなどを楽しむアドベンチャーゲームスの大会も運営している。

東京で暮らすようになつてからも本県とのゆかりは深く、思い入れは人一倍強り返る。

「山形県民は宣伝下手と言われるが、中にいると良さが分からないこともある。東京の生活が長くなり、全国を旅しているうちに、住んでいた時よりも山形の魅力を感じるようになった」と矢口さん。「昔の六十代は年寄りだったが、団塊の世代はエネルギーが有り余っている。人口が集中している東京から山形を信じたい」。中学、高校と応援団長だった矢口さんは「山形の観光の応援団長をライフワークにする」と張り切っている。